

インドネシアの中等教育向け 日本語教材作成プロジェクト

古川嘉子・藤長かおる

〔キーワード〕インドネシアの中等教育、教材作成プロジェクト、形成的評価、カリキュラム、使いやすさ (Usability)

〔要旨〕

本稿では、2003年から2007年までの予定で進行中のインドネシアの高校向け教材『にほんご1』『にほんご2』作成プロジェクトの計画・作成・評価の各段階について報告する。本プロジェクトでは、インドネシアの新カリキュラムに準拠し、教師にとって利用しやすい教材の開発をめざし、現職高校日本語教師、教育省、国際交流基金など多数の関係者が教材作成に取り組んだ。教材評価においては形成的評価を重視し、教師の利用状況を考慮した評価手法を採用した。最後に次の4点を大規模な利用が想定される教材の作成プロジェクト実施における留意点として提言した。①教育行政当局との共同作業として進める。②基本計画・目標をプロジェクト関係者全員で共有する。③進捗の確認、問題の解決を速やかに図れる工夫を行い、要所要所で全体での進捗確認を行う。④形成的評価、教材の利用状況を考慮した評価を盛り込む。

1. はじめに

一つの国、地域の中教育の一環として実施される日本語教育は、国の行政機関、学校、教育の実践者としての教師、そして生徒たちが含まれる大規模な事業となる。そこで行われる教育実践の内容・方法の質が保証されるためには、実践者である教師がそれを可能にする基本的な教授力を備えている必要がある。しかし、多くの教師が教員養成課程を経ることなく教師になっている場合、さらに現職教師研修の機会があまり確保されない場合、教育の質を確保していく上で教材の位置づけは高まる。この意味から、教材は重要な教育インフラと言えるだろう。

地域全体の教育で利用されることを前提とすると、中等教育における教材は、例えばその地域のカリキュラム・シラバスなどの教育理念、教育内容の枠組みを、現実の学習過程である授業において実現させるために作られるべきである。また、教材開発の際は、ある機関のみに限定された利用ではなく、その国・地域の大多数の教育現場で使用されるという公的な役割を担っていることを考慮して、多くの教師が混乱なく利用できるように工夫する必要があるだろう。

本稿では、現在進行中のインドネシアの高校向け教材作成プロジェクト⁽¹⁾の計画・作成・評価の各段階を報告したい。本プロジェクトでは、現職高校日本語教師、教育省、国際交流基金など多数の関係者が教材作成に取り組んだ。ここでは、今回のプロジェクトを一つのモデルとして、教材設計論の視点から評価を加え、このように多数の関係者によって進められる教材作成プロジェクトの有り方について提言したいと考える。

2. プロジェクトの背景

2.1 インドネシアの高校の日本語教育

国際交流基金の2003年の調査⁽²⁾では、インドネシアは、日本語学習者数において世界第6位(85,221名)であるが、そのうち、中等教育段階での学習者数は61,723名とその四分の三を占めている。教育機関数は432校、教師数は532名となっているが、インドネシア国内のジュニア専門家による2006年4月時点のデータ⁽³⁾では、日本語教育が盛んな6地域の普通高校・宗教高校についてだけでも、学校数は569校⁽⁴⁾、教師数は605名⁽⁵⁾となっており、さらに増加していることがわかる。これは、日本語がインドネシアの高校における第二外国語のひとつになっているためである。

インドネシアでは、教育省とは独立した組織である国家教育スタンダード委員会(BSNP)が定めるカリキュラムによって、高校の学習目的や学習内容が規定され、また、試験センター(Pusat Penilaian)が作成する後期中等教育修了試験(UN)によって、その到達度が測られる。教育の質の保証という意味において、カリキュラムと試験の果たす役割は大きい。カリキュラムについては、普通高校と宗教高校は同一カリキュラム、専門高校は別カリキュラムであるが、それぞれおおよそ10年に1回改訂される。現行のカリキュラムは、2004年入学の新入生から順次導入されている。

教師について見ると、基本的には、日本語非母語話者であるインドネシア人教師である⁽⁶⁾。公立高校の常勤の教員は、教員資格を持つ国家公務員である。多くは旧教員養成大学出身者であるが、それ以外の一般学部卒や3年制コース修了者もいるため、実際は、日本語運用力、教授力とも教師によってかなり差が見られる。また、非常勤の場合は、教員資格は必ずしも必要ではない。しかも、数学・英語などの主要科目と比べると日本語教師に占める非常勤教師の率は高い。全体として、日本語運用力については、日本語能力試験の級で言えば大半が4級合格程度であり、実力のある教師や若い教師の中には3級合格程度またはそれ以上の教師が増えてきている。教授力についても、教員養成大学出身者(または教員養成課程出身者)とその他の大学や語学学校出身者では差が大きい。

日本語教師の職能の向上のために、教育省の「語学教員研修所」(PPPG Bahasa/PPMP)が担当部署となって実施する語学教員のための全国レベルの教師研修制度があり、1988年以降日

本語教師を対象とする研修が実施されている⁽⁷⁾。また、これとは別に、地域レベルでは、行政上認知されている教科別の教師会（MGMP）があり、教師に情報交換や相互学習の機会を与えている。

一方、教科書や教材については、先に述べた国家教育スタンダード委員会が認可を行う。カリキュラムに基づいて出版された市販教材から学校や教師が選んで使うことになるが、第二外国語である日本語の教科書は市場が狭いため、教材の開発はあまり盛んでないという背景がある。

2.2 ジャカルタ日本文化センターの中等教育支援

国際交流基金は1991年にジャカルタ日本語センター（のちにジャカルタ日本文化センターに統合。「JFジャカルタ」と記す）を設置し、インドネシアの中等教育支援を行ってきた。ここでは、当初から、教育省の関係部署と連携しながら、派遣専門家及び各地域に派遣された青年日本語教師（略称SNK。2005年よりジュニア専門家：JJLEに呼称を変更。本稿では、時期に応じて呼称を呼び分けることとする）⁽⁸⁾により、上述の教師研修への支援、地域レベルでの日本語教師会支援、さらには学校訪問が行われてきた。

藤長他（2006）で報告したように、支援の内容は、10年に1回のカリキュラム改訂の影響を大きく受ける。普通高校の日本語のカリキュラムが作成されたのは1984年のカリキュラム改訂時で、構造シラバスが用いられていた。1994年のカリキュラム改訂では、外国語学習の目標がコミュニケーション能力の養成に置かれ話題シラバスが用いられるようになり、教授法としてコミュニケーション・アプローチが提唱され、大きな変換期となった。しかし、当時市販教材は、従来用いられてきた文型シラバスに基づく『Bahasa Jepang untuk SLTA（高校の日本語）1, 2』（インドネシア教育文化省（当時）1991）しかなく、教師がクラスに合わせて教材を作成すると定められていた（ワワン1996）。この状況に対処するため、1996年度にはリーダー格の教師を対象とした教室活動案作成のワークショップが教育省主催の教師研修として行われた。そこでは、出講したJFジャカルタの派遣専門家や青年日本語教師が指導役を務めた。1994年カリキュラム準拠教材については篠山・平賀（2001）で報告されているが、上記教師研修で作成された教室活動案は1年間の試用期間を経て、1998年に『普通高校日本語学習書：教室活動集』『普通高校日本語学習書：教師用指導書』として出版された。その後、この2冊を補うものとして2002年に『普通高校日本語学習書：生徒用教材』が出版されたことにより、この教材開発プロジェクトは終了した。このプロジェクトは、語学教員研修所とJFジャカルタの共同プロジェクトとして実施されたもので、同研修所の日本語指導講師、大学教師、JFジャカルタの派遣専門家、専任講師、青年日本語教師に加え、現職の高校日本語教師が作成委員として主体的に作成に参加した意義は大きい。

一方、1994年次に続く日本語の新カリキュラム作成の動きは、2000年頃から始まっている。2001年に、教育省のカリキュラムセンターからJFジャカルタに日本語の新カリキュラム作成の協力要請があり、日本人派遣専門家とJFジャカルタ専任講師がアドバイザーとなり、前述の教材開発に携わった大学教師、高校日本語教師が参加して、カリキュラム改訂作業が始まった。このようにして、JFジャカルタは、教材開発に加え、カリキュラム作成支援にも着手した。この2001年に始まった日本語カリキュラムの改訂作業は、その後、教育省の担当部署がインドネシア国家教育省普通中等教育局（PMU）、そして2005年から国家教育スタンダード委員会の管轄となり、2006年現在、試用を経た最終調整作業が行われている。

3. プロジェクトの企画

3.1 プロジェクト開始の契機

JFジャカルタでは、前述のような、カリキュラム改訂作業と並行して、新カリキュラム準拠教材作成プロジェクトを立ち上げることにした。それは、次のような現状認識に基づく。

新カリキュラムの特徴は、生徒の基本（生活）能力に基づくカリキュラム（Kurikulum berbasis Kompetensi : KBK）だということである。この国家カリキュラムは、日本語を含む外国語科目では、獲得することが期待される基本的な能力を四技能別に記述したものであり、例えば「時間（時刻、曜日、日、月、年）や学校で行う活動・行為についての言い方が理解できる。」のような抽象的な記述にとどまっている。さらに、教育を含む全ての政策面で地域の自律化が進められていることから、現在はあくまでフレームとしての国家カリキュラムを提示し、実際の教育内容、方法の決定、実施は各学校・各教師に委ねられている。

しかし筆者らが教師研修の際などに観察したところでは、高校で教える教師のほとんどは、これまで抽象的な能力記述から教育実践をデザインするための教育は受けておらず、実際のコースデザインや毎回の授業の内容や方法の決定は既存の教材を参照するか、または教材に全面的に頼る傾向がある。

一方、前述した1994年カリキュラム準拠教材は、コミュニケーション能力の養成を目的として作成されたトピックシラバスの教材なので、新カリキュラム施行後も加工して利用することはできる。しかし、コミュニケーション活動のアイデアとしての『活動集』と学習項目のリストとしての『生徒用指導書』が別冊になり、別々に配布されたため、教師が両者を関連づけ、学習目標を達成するための一貫した授業のイメージを持ちにくいという問題があった。このような状況から、たとえ教師研修を受けていない一般の教師でも、その教科書の使い方がある程度わかるように構成され、少なくとも学習者が利用する教科書については1冊にまとめた教科書の必要性が確認された。教師研修に参加した教師の多くからも、授業でどう使うかがイメージしやすい、すなわち教師にとって使いやすい教材の開発を望む声が聞かれた。また、

1994年カリキュラム準拠教材開発に参加したリーダー格の教師から、教材作成に参加したいという希望とJFジャカルタに対する新たな教材作成プロジェクトへの期待が寄せられた。

問題はプロジェクトを公的に実施するための実施主体であったが、2003年当時、カリキュラム改訂作業を通じてJFジャカルタとの連携が強化されていた教育省普通中等教育局から、開発に共同して携わりたいという声が上がった。これにより、教材作成プロジェクトはインドネシアの公的なプロジェクトとなった。

3.2 プロジェクトの目的・内容・形態

2003年6月に、JFジャカルタにおいて、第1回の全体会議が開催され、教育省の関係部署、各地域の高校日本語教師会会長、大学教師、JFジャカルタ所長、同担当職員、派遣専門家、専任講師、青年日本語教師、総勢30名程度が参加して、プロジェクトの目的、内容、実施形態や進行スケジュール等について取り決めた。

プロジェクトの目的は、普通高校および宗教高校の学習者を対象とする新カリキュラムに準拠した教科書（語学系正課11年生用、12年生用）を作成することである。また、JFジャカルタとしては、日本語教育の現地化に向けて、教材作成に参加するリーダー層の高校教師の成長を計ること、すなわち自らの教授活動を振り返る機会を与え授業設計力や教材開発力を養成すること、さらには共同プロジェクトへの参加を通じて共同作業を進行するノウハウを学ぶことも隠れたプロジェクトの目的と考えていた。

プロジェクト期間は2003年からの5年間で、プロジェクトの内容は、①参考素材としての『教科書をつくろう：練習編』のインドネシア語訳作成、②カリキュラムに準拠したシラバス作成、③教科書作成委員対象のワークショップ実施、④教科書教材の作成を、段階的に行うことである。JFジャカルタと普通中等教育局との共催事業となり、予算については、日本語教材制作重点支援事業として位置づけられ、国際交流基金日本語国際センターからの予算措置が決定された。

3.3 プロジェクトの進め方

鈴木（2002:16）の「計画 実行 評価」の3段階、島田・柴原（2005）の教材設計論の適用、島田他（2003）の実際例などから、教材の作成（執筆）に着手する前の現状把握と教材設計の重要性、作成途中または作成後の教材評価を作成過程に含めることの必要性が理解できる。また、JFジャカルタは、2001年から実施していた専門高校用の教科書作成プロジェクト（5カ年計画）において、カリキュラム 到達目標 シラバス 素材集 教科書の各段階で、高校の授業や教師研修の場を利用して「計画 実行 評価」の過程を組み込んだ経験（エフィ他2006）を持っており、それも参考にしつつ、5カ年の教材作成プロジェクト計画を表1のよう

に策定した。

表1 普通高校・宗教高校用日本語教材作成プロジェクト年度別スケジュール

年	『にほんご1』(11年生用)	『にほんご2』(12年生用)
2002	ニーズ調査、初期分析、シラバス案の作成	JFジャカルタの事前作業
現状把握		
2003	6月 全体会議 教材作成プロジェクトの策定、教材作成委員の認定 参考素材としての『教科書を作ろう れんしゅう編』インドネシア語訳作成	
2004	7月～12月 地域会議 11年生シラバス作成 1月 全体会議(WS) 11年生シラバス検討	2月～5月 地域会議 12年生用シラバス作成 6月 全体会議 12年生用シラバス検討
シラバス決定		
2005	6月 全体会議 教科書教材企画案の策定 7月～『にほんご1』試用版執筆 12月 全体会議 原稿検討 1月～『にほんご1』修正 4月 全体会議 再検討	
2006	6月 『にほんご1』試用版(版)完成 7月～『試用』の実施(版) 12月 全体会議 試用版(版)の評価 1月～『にほんご1』試用版(版)修正 4月 全体会議 試用版(版)の評価	6月～『にほんご2』試用版執筆 12月 全体会議 原稿検討 1月～『にほんご2』修正 4月 全体会議 再検討
2007	6月 『にほんご1』試用版(版)完成部分より送付開始 『試用』の実施(版) 『にほんご1』試用版(版)の修正 『にほんご1』完成	『にほんご2』試用版完成 『試用』の実施。 4月 全体会議 試用版の評価 『にほんご2』試用版修正
2007	『にほんご1』配布	『にほんご2』完成 『にほんご2』配布

(注) 作業段階は、学年度と合わせて、6月下旬～7月上旬の時期を年度の区切りとする。

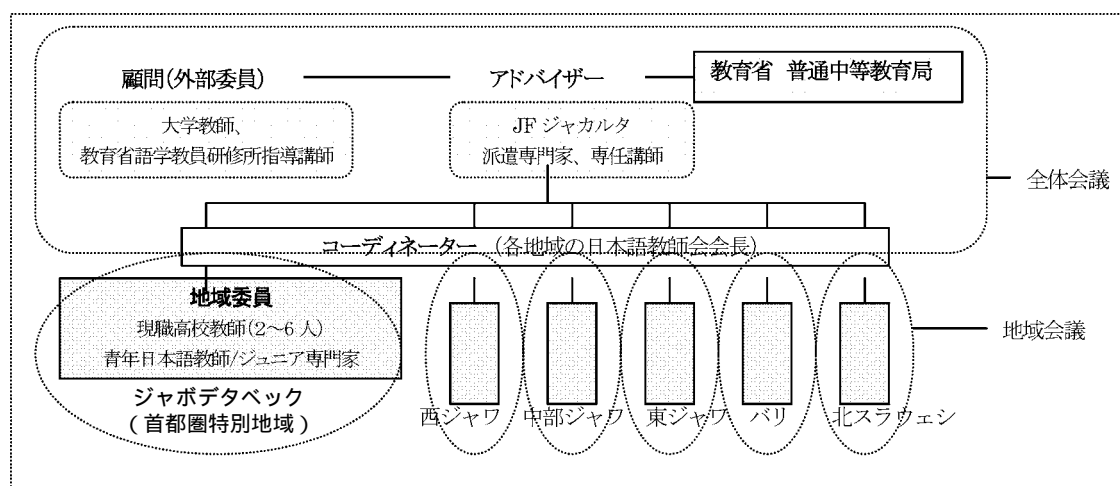
2002年度の「現状把握」段階はJFジャカルタの内部作業とし、2003年6月のプロジェクトの策定が本プロジェクトの開始にあたる。全体は、①シラバス作成、②『にほんご1』の執筆、③『にほんご1』の試用・評価と『にほんご2』の執筆、④『にほんご1』の完成と『にほんご2』の試用、⑤『にほんご2』の完成の5段階(5カ年)計画である。設計段階にあたるシラバス作成は、教科書の根幹を成す重要な段階であるため、シラバス作成段階から教材作成委員(後述)全体の共通理解を得るために分担せずに、同じ内容を全員で検討し、2004年1月の全体会議では教材作成委員全員を対象としてワークショップを開き、シラバス作成作業の意味

インドネシアの中等教育向け日本語教材作成プロジェクト

や内容について確認した。そして、『にほんご1』『にほんご2』のそれぞれの執筆段階を学年度を合わせた進行スケジュールにし、教材作成委員がそれぞれの教室で試しながら教材を執筆できるようにしたこと、さらに『にほんご1』『にほんご2』のそれぞれに試用期間を1年間設けて、教材の形成的評価を行うことが特徴である。

各段階の作業を進めるために、図1の教材作成委員が組織された。青年日本語教師が配置されている6地域の現職高校日本語教師の中から日本語力と教授力のある者(各地域3～6名)⁹⁾が地域委員(37名)として選ばれ、そのまとめ役(コーディネーター)を各地域の教師会の会長が果たした。JFジャカルタの専門家(期間中交代があり延べ5名)や専任講師(延べ3名)は、アドバイザーとして企画案を作成し、作業の進捗管理を行い、必要な助言を与えるとともに、教育省の関係部署との交渉や、プロジェクト実行に関わる事務作業を担当した。執筆や試用評価の作業は、地域別に分担し、それを地域委員が担当した。作業結果は年間5、6回の地域会議で検討し、そこでは、青年日本語教師(のちのジュニア専門家)がアドバイザー役を果たした。そして、ジャカルタの全体会議では各地の代表者が参加し、地域会議の結果を検討した。外部委員(5名)である大学の日本語教師、語学教員研修所の指導講師らはプロジェクト全体の企画・実施方法について必要に応じて助言したり、原稿にコメントしたりする役割を務めた。

図1 教材作成委員



4. プロジェクトの実施

4.1 シラバス作成の段階

表2は新カリキュラムの概要を示したものである。新カリキュラムでは、四技能別の能力記述である「基本的能力」(KD: Kompetensi Dasar)について、11年生で11項目、12年生で8項目を身につけることを目標としている。そこで、教材のシラバス作成にあたって、まず、

「基本的能力」(KD)とその到達指標である「目標能力記述」(Indicator)に基づいて、実際の教室活動を想定することから始めた。そして、想定した教室活動を、カリキュラムに定められた8つの大テーマ(表3の2~9)に分けた。次に、それをさらに小テーマ(表3の2.1~9.2)に再分類した後、新カリキュラム付属の「学習項目資料」に示されている文法項目/文型、表現、語彙、談話例、漢字を、教室活動とすり合わせながら小テーマ別に分けてシラバス案を作成した。

表2 新カリキュラム概要

学習年次	11、12年生	基本的能力	聞く:全部で4項目 話す:全部で4項目 読む:全部で6項目 書く:全部で5項目
学習時間	264コマ~288コマ *1コマ=45分	語 数	1000語 *学習項目資料の498語が必修
シラバス	話題シラバス *8つを指定	漢 字	数の指定なし *学習項目資料の50字が必修

ここまでは、JFジャカルタの内部作業とし(カリキュラム改訂作業と並行して2002年に実施)、2003年6月の第1回の全体会議終了後から、各地域でこのシラバス案を使って授業をしながら、修正を加えた。教材作成委員(地域委員)は、想定学習時間を考慮しながら、会話例と活動例を作成し、その中で用いる文型、語彙、表現が適当かどうかを検証するが、その際、1994年カリキュラム準拠教材やインドネシア語訳を作成した『教科書をつくろう練習編』など

表3 シラバスの大テーマ、小テーマ一覧

11年生 『にほんご1』		12年生 『にほんご2』	
1.発音・文字		6.趣味	6.1 好きなもの 6.2 趣味 6.3 できること
2.わたし	2.1 挨拶 2.2 紹介	7.旅行・レクリエーション	7.1 レクリエーション 7.2 旅行の計画 7.3 観光地 7.4 旅行の経験
3.学校環境	3.1 持ち物 3.2 教室の中 3.3 学校の中 3.4 スクールカレンダー 3.5 時間割		8.健康
4.家族の生活	4.1 家族 4.2 家族の様子 4.3 うち	9.将来の夢	9.1 欲しいもの 9.2 将来
5.日常生活	5.1 毎日の生活 5.2 暇なとき 5.3 昨日したこと 5.4 買い物 5.5 食べ物・飲み物 5.6 まち	* 有名人	
		*「有名人」は追加小テーマで、時間の多いクラス向きである。	

の参考となる素材を参照する。そして、この地域別作業結果をもとに、2004年1月の全体会議で11年生シラバスについて、2005年6月の全体会議で12年生シラバスについて検討し、2年分のシラバス(例:図2)をまとめた。

図2 「2.2 紹介」のシラバス記述例

目標能力記述 聞く：自分や他の人についての情報(名前や所属や国籍など)を聞き取ることができる。 話す：自分や他の人について紹介することができる。 読む：自分や他の人を紹介したテキストの内容が把握できる。 書く：単語や文を書くことができる。					
時間：8コマ(1コマ=45分)					
学 習 項 目			活 動	会 話 例	教 材
文 型	語 彙	表 現			
1. 名前や所属を紹介する わたしはアリスです。 SMAN1のAリスです。	わたし、わたしたち、せいと * ~年~組、~年生(1~12年生)	はじめまして、どうぞよろしく(お願いします)	話す ロールプレイ	A：はじめまして。(わたしは)~です。 どうぞ、よろしく。 B：はじめまして。	1②K.3

*は学習項目資料にある498語以外の語彙であることを示す。

4.2 教材の設計段階

JFジャカルタでは、教材の構成・内容等についての企画案と、シラバスに基づいた1課分(小テーマひとつ分)のプロトタイプを作成し、まず、普通中等教育局の関係部署に評価を求めた。それによって、①基本的能力(KD)と目標能力記述(Indicator)が可視化されていること、②地域や学習者の多様なニーズやレベルに対応できること、③本冊と別に、学習過程がわかる教師用指導書を作ることの3点が、必要条件になった⁽¹⁰⁾。次に、教材の構成、各課の構成を明らかにした教材作成企画書案、教科書および教師用指導書の小テーマひとつ分のプロトタイプを2種類作成し、地域会議で評価を求めたのち、2004年6月の全体会議で検討した。その結果、教材の構成を、生徒の学習過程が可視化され、教師にとって授業設計がしやすく、使いやすくすることをめざし、図3のように、一つの小テーマを、作成委員が想定した授業構成にそって組み立てることになった。

カリキュラムからとった「①目標能力記述」は、抽象的であり、具体的な到達目標がわかりにくいと考え、「②目標会話」で課の到達目標を示した。また、ひとつの小テーマには、「語彙提示 文型練習 活動」という教授活動のクラスターがいくつか存在する。文型練習の前に必要になる文型の導入では、「⑥ぶんぼう」のどの箇所を見ればよいかを、番号で提示する。「ぶんぼう」をクラスターの中ではなく、外にまとめて提示したのは、小テーマごとにそこで学習

図3 『にほんご1』試用版の小テーマの構成と学習の流れ

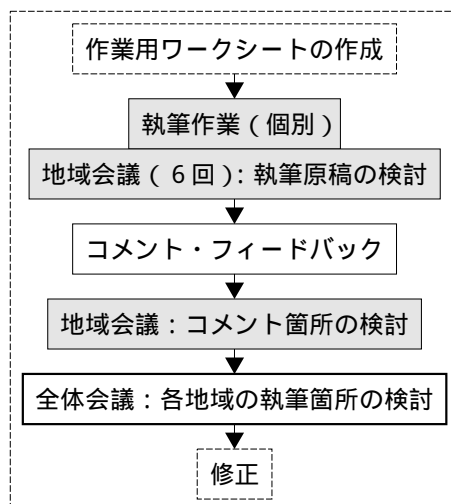
本 冊	教師用指導書
<p>①目標能力記述 (Indikator): その小テーマ学習後に獲得される四技能ごとの目標能力を知る。</p> <p>②目標会話 (Kalimat Inti): その小テーマで話せるようになる会話を絵を見ながら聞いて、内容についてイメージを持つ。正確に理解できなくてもいい。小テーマ学習後にもう一度聞いて確認することもできる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>③語彙提示 (Kosakata): その後の活動で使う語彙の意味、表記を知り、口頭練習する。</p> <p>④文型練習 (Latihan Pola Kalimat): その後の活動で使う文型の意味、使い方を知り、口頭練習する。</p> <p>⑤活動 (技能別) (Kegiatan): ③、④で学んだ語彙・文型を場面の中で使う。話す・聞く・読む・書くに分かれる。 教授活動のクラスター</p> </div> <p>⑥ぶんぼう: ④を学習するときその文型の意味、使い方について調べる。</p> <p>⑦かんじ: 小テーマで使われる漢字の形、音、意味、書き方を知る。</p> <p>⑧にほんのぶんか: その小テーマと関連する日本文化関連の説明を読み、情報を得る。</p> <p>⑨ふくしゅう: その課で学んだ語彙・文型・漢字を練習問題で確認する。</p> <p>⑩かんじのふくしゅう: その大テーマで学習した漢字の練習問題をして確認する。(大テーマの最後にのみある)</p>	<p>①目標能力記述 (Indikator): 同</p> <p>②学習時間 (Waktu): その小テーマにかかる標準学習時間</p> <p>③学習過程 (Langkah Langkah Pembelajaran): その小テーマの活動・学習内容一覧 (基本的能力 (KD: Kompetensi Dasar) 学習時間、学習項目 (文型) 活動 (Kegiatan) 4技能、活動の種別 (インタビュー、ロールプレイなど) 活動形態 (ペア、クラスなど) の記述がある。</p> <p>④教え方の留意点: 副教材の使用、事前活動や事後活動のアイデア、聴解や読解問題解答、地域裁量語彙の扱いなど</p> <p>⑤語彙 (Kosakata Baru): その小テーマの新出語彙一覧</p>

した文法項目全体を振り返れるようにした方がよいという考えからである。また、「地域や学習者の多様なレベルやニーズ」に対応するため、『本冊』の活動では発展的な活動や追加活動を区別して示し、『教師用指導書』の「③学習過程」には、地域や教師の裁量で付け加えられる語彙や他の活動のアイデアを載せるという工夫をした。その結果、『教師用指導書』の「②学習時間」に比すると多めの活動が記載されることになった。

4.3 『にほんご1』の作成段階

『にほんご1』の執筆は図4の流れで進めた。まず、2004年6月の全体会議 (企画会議) の結果に基づき、「執筆基準」を完成した。次に、作業効率を図るために、小テーマごとに「①目標能力記述」「②語彙表示」と「③文型練習」の提示文型を書いた教材作成用ワークシートを各地域の青年日本語教師と協力して作成した。そして、各地域が2～3の小テーマを分担して執筆した。ただし、「ぶんぼう」はJFジャカルタの専任講師が担当した。執筆作業は同年7月下旬から11月中旬にかけて行われ、地域の作業結果が11月下旬にJFジャカルタに送られた。

図4 『にほんご1』の作成過程



JFジャカルタは、コメントフィードバックを12月上旬に各地域に戻し、各地域ではコメントの部分について地域会議で検討を行った。12月中旬、各地域の結果をジャカルタの全体会議で1週間にわたって検討し、『にほんご1』本冊と教師用指導書の内容が確定した。その後、JFジャカルタで修正し、2005年4月の全体会議で再検討され、原稿確定後、付属音声テープの録音を行った。同年6月『にほんご1』試用版(版)が完成した。『にほんご2』の執筆は、次章に述べる試用と並行して『にほんご1』と同様の手順で行われた。

4.4 『にほんご1』の試用と評価

4.4.1 形成的評価とその手法

『にほんご1』の試用に際しては⁽¹¹⁾、教材使用者である教師が、実際に使用して評価する形成的評価を重視することとし、島田他(2003)が教育用素材ウェブサイトの評価に採用している「状況に埋め込まれた評価(situated evaluation)の視点を取り入れた。さらに、McDonough and Shaw(1993)の提案した外側評価(external evaluation)と内側評価(internal evaluation)を行った。特に、「インドネシア人日本語教師が実際にどのように教科書を使用しているか」「どのような点で使用しやすい、または使用しにくいと感じるか」について、「実際の使用のしやすさ(Usability)」という観点からの評価をめざした。この他に、総括的評価は、外部委員の大学教師・教育省職員にお願いした。

『にほんご1』の試用は2005年7月から2006年5月までの期間に6地域⁽¹²⁾で行われた。この期間を通して、対象となる11年生に対して33名の現役教師が教材の試用を行った。各地域で試用期間中3回の地域評価会議が開催された。開催時期は、1学期の後半に入った11月、1学期が終わった1月、2学期の後半に入った3月であった。そこで得られた情報は地域のジュニア専門家を通してJFジャカルタに送られ、さらに12月と4月に行われる全体会議で地域代表者

により検討された。さらに、地域評価会議で、試用の情報を集約的に集めるために、外側評価、内側評価を盛り込んだ以下の3回のアンケート調査を行った。

アンケート1 1：装丁やレイアウト、ページ数、課の数など教材の外的な側面に着目した調査(外側評価)

アンケート1 2：実際に利用してみて気付いた点を1課ごとに自由に記述してもらう調査(内側調査)

アンケート2：アンケート1の回答で特にコメントの多かった項目に関するより詳細な調査(外側調査)

アンケート3：実際のカリキュラムの中で教材を利用した場合の進度などの調査(内側調査)
また、教材完成後、多くの教師に利用してもらうための改善に向けて、教材作成委員以外の教師の利用時データを集める必要もあるため、以下の3つの手法をとった。

- ①アンケート1 1を、地域での教師会の際に参加者の一般教師に記入してもらった。(外側調査)
- ②教育省語学研修所主催の基礎研修(2週間)の模擬授業で参加者に試用教材を利用してもらい、その様子を派遣専門家、JF専任講師、ジュニア専門家が観察した。(内側調査)
- ③「状況に埋め込まれた評価」の観点から、作成委員以外で、試用教材について説明を受けた経験のない教師に試用教材を実際の授業で利用してもらいその授業をビデオ録画と同時に観察し、前後に授業準備プロトコルを聞くインタビューを行った。(2006年5月までに2名を予定したが、1名は都合がつかず1名のみ)(内側調査)

4.4.2 結果とその分析

ここでは、特に、内側調査の結果を報告したい。主に、アンケート1 2と地域小会議の結果を集約すると、「語彙」、「文法」、「文化」、「漢字」などの項目と比べて、「活動」についての指摘が多かった。また、「活動」の数が多すぎて全てを扱いきれないという声が多かった。さらに、教師研修での教材使用実態の観察結果、プロトコル調査の結果から、以下のような使用上の問題点があきらかになった。

- ① 構成の問題点
 - ・「語彙提示 文型練習 活動」の教授活動クラスター間の切れ目が認識しにくい。
 - ・「ぶんぼう」の部分は、その存在に気付かない。
- ② 意図の不明瞭さ
 - ・「目標会話」を授業でどう使うかわからない。
 - ・文型練習や「活動」の新出語彙を表す□を文型や重要事項と勘違いする。
 - ・文型を導入する際や「活動」に入る際に言及すべき、その文型が使われる状況、「活動」の目標などが、教材の記述では使用する教師に伝わりにくい。

- ③ 「活動」の方法記述の不明瞭さ、「活動」自体の問題
 - ・書かれた指示を読んでも方法が理解できない「活動」がかなりある。
 - ・「活動」自体が複雑なため時間がかかりすぎる
 - ・カードなどの副教材の作成に手間がかかりすぎる「活動」がある。
- ④ 必要な情報が探せない

文型の説明がどこか探せない。 / 小テーマ内の新出表現がどれも見つけれない。

以上のように、模擬授業ではあっても、教師自身が実際に教えてみる経験を通して、初めて明らかになる試用版の問題点があることがわかった。この他に、限られたデータではあるがプロトコル調査の結果と研修で観察された教師の行動とも合わせて見ると、初めて教科書に接した教師には、以下のような行動の特徴があることがわかった。

- ① ページの早い順に最初から順番に教えていこうとする。「ぶんぼう」には気がつかない。
- ② インドネシア語による説明が多い部分、文字が多い部分はその都度じっくり読むことをしない。日本語の語彙・文型・会話文を先に見て、全体の構成を捉えようとする。
- ③ 付属の教師用指導書は、教師自身が頭の中で授業計画を作った後で初めて見る。したがって、教師用指導書に補足説明がかかれていても無視される可能性がある。

4.4.3 『にほんご1』試用版の改訂

以上の試用による評価の結果から、教師の教授の流れを妨げずに補助するような構成にする必要があることがわかった。そこで、大きな修正として当初『にほんご1』を用いて教えた際に行われると考えていた教授の流れ(図3)を図5のように変更することとした。

図5 『にほんご1』試用版と完成版の小テーマ構成比較

試用版の小テーマ構成	完成版の小テーマ構成
①目標能力記述 (Indikator)	①小テーマの目標能力記述 (Indikator)
②目標会話 (Kalimat Inti)*	②小テーマの学習内容に関する質問など (Pengantar)
③語彙提示 (Kosakata)	③活動までの小目標提示
④文型練習 (Latihan Pola Kalimat)	④語彙提示
⑤活動 (技能別) (Kegiatan)	⑤文型説明 + 文型練習
⑥ぶんぼう*	⑥活動 (Kegiatan) 教授活動のクラスター
⑦かんじ	⑦かんじ
⑧にほんのぶんか	⑧にほんのぶんか
⑨ふくしゅう	⑨ふくしゅう
⑩かんじのふくしゅう	⑩かんじのふくしゅう

このほかに、試用によって「目標会話」の使い方が理解されにくく、「活動」の目標も伝わりにくいことがわかった。さらに、語彙 文型練習 活動のクラスターの切れ目がわかりにくいという問題もあった。それらの解決に向けて、「目標会話」を廃し、切れ目を明確化し、語

彙・文型・活動の導入時の目標提示・動機付けに使えるように、それぞれのクラスターの最初に「活動」までの小目標を提示するなど、目標と内容の関連がわかりやすいようにした。さらに、教師用指導書のレイアウトも生徒用教材に合わせるようにし、どこに何が書かれているかが見やすくなるようにした。また、各小テーマ内の「活動」を再検討し、一部を『教師用指導書』に移動して必ず扱うべき「活動」の数を減らした。その他、問題の多かった「活動」の指示の書き換え、絵の差し替え、語彙の提示箇所の移動、文型提示・練習の見直しなど細かい修正を行い、試用版として再び試用を行いながら修正を加え、2007年初頭に完成版原稿を作成する予定である。

2006年6月に原稿が完成した『にほんご2』試用版においても、『にほんご1』の試用結果を受け、教授・学習の流れを考慮し構成を『にほんご1』完成版にそろえた。試用・評価の方法も『にほんご1』に準じている。

5. プロジェクトの評価と今後の課題

5.1 教材作成プロジェクトの評価

本プロジェクトは本稿執筆時の2006年9月現在も進行中であり、まだ全般的な評価ができる段階ではない。しかし、これまでのところプロジェクト担当者である筆者らが把握できた成果、問題点を記録したい。

「1. はじめに」で述べたように、本稿では、教材作成過程を教授設計論の「計画 実行 評価」の3段階を指標として捉え整理した。当初予定した「計画 実行 評価」の流れを進め『にほんご1』完成版の一手前まで到達したというのが、これまでのところの成果と言える。特に、形成的評価の手法を盛り込むことで、教材の修正の方向を具体的にイメージすることができた。

教材が形を成してきたことにより、前章までも言及している教師研修の内容がより具体的になり、参加者にとっても教材にそって授業を組み立てるという目標が明確に意識できるようになって来た。ジュニア専門家による地域支援でも教材を中心とした展開が図れるようになった。さらに、通常の学校での教授活動に加えて、大きな負担となる教材作成にあたった高校日本語教師も、教材作成を通じて自らの教授活動を振り返る機会になり、委員全員とは言えないが、他の教師に教材の説明をする、他の教師の前で教材を用いたモデル授業をすることで、地域での新教材を利用した日本語教育支援という広い視点を獲得している。そして、教育省普通中等教育局との共催であることにより、教師の活動が公務として認識され、高校日本語教師の積極的な参加が可能となっただけでなく、今後、教材を広範囲に配布・広報していくことも可能となった。

プロジェクト運営という視点から見ると、必要な時期に全体会議を行いコンセンサスを得る、

そして実際作業は分担し地域会議でそれぞれの責任において作業を進めるという流れにより、大人数のプロジェクトの作業を効率的に進行できたと考える。ここでは青年日本語教師（ジュニア専門家）が地域とJFジャカルタをつなぐ重要な役割を果たした。JFジャカルタと青年日本語教師（ジュニア専門家）との情報交換は2004年からインターネットプロバイダーのeグループ機能を用いて行ったが、現在まで1000件を越す投稿があった。このような共有ツールが大規模プロジェクトには必須であることが確認された。

ただし、プロジェクト進行中、派遣専門家・青年日本語教師（ジュニア専門家）また執筆担当委員の交代もあり、プロジェクト開始当初の目的や方針を引き継いでいくことは困難ではあったが、2003年当初に関係者全員でプロジェクトの全体像を決め、確認し、文書として記録されていることから、そこで決定された計画を参照し、時に応じて微調整しながら進めるができた。さらに、プロジェクトの開始時から終始JFジャカルタのインドネシア人専任講師¹³⁾が、執筆者である高校日本語教師、行政当局である教育省、そして日本人である派遣専門家・青年日本語教師との間に立ち、それぞれの意図を尊重しながら調整する役を引き受けてくれたことが、大きな問題なくプロジェクトを進めてこられた要因と言える。将来予想されるカリキュラム改訂、それに続く教材改訂または新教材作成にあたっては、専任講師に蓄積された、カリキュラムに基づいた教材作成方法の知識、多数が参加するプロジェクト管理のノウハウが生かされるものと期待するが、単に属人的に知識を引き継ぐだけでなく、客観的な記録として保管・活用していく必要があるだろう。

問題点の一つとして5年という長丁場の中に、当初は熱意をもって作業に参加してきた委員も、通常業務の上に行く教材作成作業を負担に感じ、次第に集中力が切れ、疲れを訴えるものもあった。その場合、地域の青年日本語教師（ジュニア専門家）がプロジェクトの意義を確認し、新たに動機付けを行い、さらに地域で委員の交代を行うなどの方策を採った場合もある。

以上から、大規模な利用が想定される教材の作成プロジェクトにおいては以下の諸点が留意されるべきだと考える。

- ① 教育の実践にあたる教師が参加する必要がある、そのために、教育行政当局との共同作業としていく。
- ② 基本計画・目標の策定をプロジェクト関係者全員で共有できるようにする。
- ③ 作業の分担は必須だが、進捗の確認、問題の解決を速やかに図れる工夫を行う。さらに、要所所で全体での進捗確認を行う。
- ④ 形成的評価、教材の利用状況を考慮した評価を盛り込む。

5.2 今後の課題

『にほんご1』については、試用をもって「計画 実行 評価」の評価の段階にあるが、今

後完成後には、さらに教師による使用状況の調査だけでなく教育における利益享受者である生徒の評価を受ける必要があり、評価段階はさらに継続していく。その結果から、教材の改訂、次回の教材作成の基礎データを集積していけるよう、今後具体的な評価の計画をたてていかなければならない。

また、完成した『にほんご1、2』を教師研修で使用し、教師の教授力養成につなげて行くことも肝要である。特に経験豊かな教師の中には旧教材での教え方が身について固定化している例も見られ、このような場合、新教材を使ってみることで自分の教授活動を再考する機会としてほしいと考える。そこで、新教材を用いた研修では、教師の教授のあり方を標準化するのではなく、そこから先に向かって各自が工夫する力をつけて行けるような柔軟な有り方が求められる。そのように現地の教師が教材の主旨を理解し、その上で各自の現場に合わせて教材を加工できるようになって行けば、新カリキュラムの唱える現場重視の考え方がインドネシアの各地域で実現されるものとなろう。

〔注〕

- (1) 高校には、普通高校、宗教高校、専門高校があるが、このプロジェクトの対象は普通高校及び宗教高校である。
- (2) 独立行政法人国際交流基金(2005)『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2003』凡人社による。
- (3) 6名のジュニア専門家が、西ジャワ州、ジャボデタベック(首都圏特別地域)、中部ジャワ州、東ジャワ州、バリ州、北スラウェシ州に派遣されている。日本語教育機関と教師についての情報を毎年更新している。
- (4) インドネシアの普通高校・宗教高校は2年次(11年生)に理科系・社会系・語学系の3つのコースに分かれる。この数字は語学系正課、選択科目、課外活動としての日本語プログラムを全て含めたもの。ジャカルタ周辺地域(80校)はプログラムの重複がある数字。
- (5) 一部、複数校で教える教師が重複して含まれた数字である。
- (6) 地域によって日本人教師が教員補助として入っている場合があるが、きわめて少数である。
- (7) 研修は、「基礎研修」「継続研修」「中級研修」「上級研修」の4つに段階化され、下位の研修の成績優秀者が上位の研修に進む。研修は招聘制で期間は2週間である。ただし、「上級研修」はまだ実施されていない。詳細は、藤長他(2006)参照。
- (8) 国際交流基金派遣のジュニア専門家(旧称青年日本語教師)は1995年度よりインドネシア各地の高校に入りカウンターパートであるインドネシア人教師の教授力・日本語力の向上に向けて活動している。通常、2校から3校に配属されている。他に、地域の日本語教師間のネットワーク支援、国家教育省と国際交流基金の共催で行う教師研修への出講、教材作成プロジェクトへの支援など活動は多岐にわたる。
- (9) 授業の基本的な流れを理解して授業計画の力があること、日本語能力試験3級程度の日本語力を身につけていることを条件とし、日本語教師会長に推薦してもらった。委員は毎年見直した。
- (10) 項目として明記されているかという意味での、後述の外側評価的な指摘が中心だった。
- (11) 『にほんご1』の試用と評価の詳細については古川他(2006)で報告している。
- (12) 試用はジュニア専門家が配属され、教材作成委員がいるジャボデタベック(首都圏特別地域)、西ジャワ

インドネシアの中等教育向け日本語教材作成プロジェクト

州、中部ジャワ州、東ジャワ州、北スラウェシ州、バリ州で行われた。北スマトラ州、南カリマンタン州では意見聴取のみ。

⁽¹³⁾ただしプロジェクト期間中、1名は1年間留学のため不在、1名は途中退職したため、別の1名が作業を引き継いでいる。

〔参考文献〕

- エフィ・ルシアナ、山下美紀、森本由佳子(2006)「インドネシアの専門高校観光部門観光サービス業務専攻用日本語教科書『インドネシアへようこそ』作成報告」『国際交流基金日本語教育紀要』第2号、121-126、国際交流基金
- 篠山美智子、平賀牧恵(2001)「インドネシア中等教育における日本語教材開発 1994年カリキュラム準拠『インドネシア普通高校日本語学習書』作成過程を中心に」『世界の日本語教育 日本語教育事情報告編』第6号、209-225、国際交流基金日本語国際センター
- 島田徳子、柴原智代(2005)「日本語教材作成のための三つの視点 教授設計論の適用、学習過程への注目、教室活動の分析指標」『国際交流基金日本語教育紀要』第1号、87-104、国際交流基金
- 島田徳子、古川嘉子、麦谷真里子(2003)「インターネットを利用した日本語教師に対する教材制作支援「みんなの教材サイト」<http://www.jpfi.go.jp/kyozai/>の運用」『日本語国際センター紀要』第13号、1-18、国際交流基金日本語国際センター
- 菅井英明(2004)「教材の評価とその手法」『日本語教育における評価法に関する基礎的資料整備とその分析』文部省科学研究費補助金研究成果報告書・課題番号1368037、120-125
- スジアント、小林佳代子(2004)「インドネシアの高等学校における日本語教育のカリキュラム」『世界の日本語教育 日本語教育事情報告編』第7号、59-70、国際交流基金日本語国際センター
- 鈴木克明(2002)『教材設計マニュアル』北大路書房
- 藤長かおる、古川嘉子、エフィ・ルシアナ(2006)「インドネシアの高校日本語教師の成長を支援する教師研修プログラム」『国際交流基金日本語教育紀要』第2号、81-96、国際交流基金
- 古川嘉子(2005)「海外における日本語教師の教材作成認識」『共生時代を生きる日本語教育 言語学博士上野田鶴子先生古希記念論集』239-261、凡人社
- 古川嘉子、登里民子、エフィ・ルシアナ、森本由佳子(2006)「インドネシアの中等教育向け日本語教科書の試用と評価」日本語教育研究大会2006発表原稿
- ワワン・ダナサスミタ(1996)「インドネシア普通高校における日本語教育」『世界の日本語教育 日本語教育事情報告編』第4号、1-11、国際交流基金日本語国際センター
- Departmen Pendidikan dan Kebudayaan Republik Indonesia (1998) *Pelajaran Bahasa Jepang untuk Sekolah Menengah Umum Buku Kegiatan Kelas* 『インドネシア普通高校日本語学習書 教室活動集』. Departemen Pendidikan dan Kebudayaan.
- Departmen Pendidikan dan Kebudayaan Republik Indonesia (1998) *Pelajaran Bahasa Jepang untuk Sekolah Menengah Umum Buku Pegangan Guru* 『インドネシア普通高校日本語学習書 教師用指導書』. Departemen Pendidikan dan Kebudayaan.
- Departmen Pendidikan dan Kebudayaan Republik Indonesia (2000) *Pelajaran Bahasa Jepang untuk Sekolah Menengah Umum Buku Pegangan Siswa* 『インドネシア普通高校日本語学習書 生徒用教材』. Departemen Pendidikan dan Kebudayaan.
- McDonough, J. and C. Shaw (1993) *Materials and Methods in ELT*. Blackwell.
- Sheddy N. Tjandra. (1991) *Bahasa Jepang 2 untuk Sekolah Lanjutan Tingkat Atas*. Department Pendidikan dan Kebudayaan.

kan dan Kebudayaan.

The Japan Foundation, Jakarta (2003) 教科書を作ろう *Kumpulan Latihan 1*. The Japan Foundation, Jakarta

Wiwi Martalogawa. (1991) *Bahasa Jepang 1 untuk Sekolah Lanjutan Tingkat Atas*. Department Pendidikan dan Kebudayaan.